

「畳」の語誌

——住生活と言語文化——

郡 千寿子

はじめに

日本における最大の国語辞書である『日本国語大辞典』（小学館）の改訂版が刊行（平成十二年十一月予定）され始める。この辞書に新たに加えられる「語誌欄」の項目執筆という仕事を通して、ことばはひとつの文化であり、その時代の社会状況や生活様式と密接に関わりながら存在する、ということのを再認識したのであるが、本稿では、住生活語彙のなかでも日本文化を代表することばのひとつである「畳」の語を取り上げて、言語文化史という観点から、ことばの歴史的変化を生生活環境との関係において見直そうという姿勢で、考察検討してみたい。

一

不慮の死を遂げるのではなく、病氣や老衰で家庭において穏やかに死ぬことを望んで「畳の上で死にたい」と言

う。現実には、医療の進歩に伴って病院での死が当たり前になってしまったが、そうした状況ではなおさら、年輩の人々は、住み慣れた我が家で、また家族に見守られて、という気持ちを込めてこの表現を用いるのだと思われる。

また、「女房と畳は新しい方がいい」ということわざもある。男性からの一方的で勝手な論理だと抵抗がある人もいるのではないだろうか。一説には「生活をともにする最も身近な存在の女房（妻）には、いつも新鮮でいてほしい」との願いがこめられたものであるという。いずれにしても、女房は、畳のように簡単には取り替えられないものである（簡単に取り替えられたら女性としてたまったものではない）が、確かに新しい畳は、蘭草の香りが心地よいものである。そして、畳の方は取り替えることで半永久的に使えるものであったのだ。

最近、テレビのCMで、個性派女優の市原悦子さんが、このことわざをもじって「女房と畳は・・・なんていうけれど、最近では、ダンナとキッチンが、新しい方がいいんですってよ。」と夫役の俳優に向かって叫んでいる場面に遭遇した。「ダンナとキッチンは新しい方がいい」という女性の視点からの印象的な表現を聞いた時、爽やかな気分になったのは、私だけであろうか。

冷静にことばの面から分析してみると、単に男性から女性へと視点を移した表現であるだけでなく、まさしく現代社会の一面を切り取ったCMであることにも気づかされる。自分の伴侶である「夫」のことを「主人」ではなく、「ダンナ」と呼称している点、そして、「台所」ではなく「キッチン」という外来語を使っている点は、現代社会の反映であり、新しい家族形態のイメージを表現したものであるといえよう。家庭において、妻という立場の女性が発言権を持ち、女性主導の家族形態がすでに容認されつつあるという現代社会のひとつの状況を背景にして、このCMは成り立っている。つまり、新しい社会の側面を物語ったものであり、使い古されたことわざを現代風に言

い替えることによって、価値観の変化にまで言及しているのである。昔のように「女房と畳は新しい」と一方的に言わせない男女平等の思想の浸透は、主従関係を連想させる「主人」の呼称を使っていない点にも現れている。そして、「キッチン」という外来語は、畳に取って替わった、現代の新しい住生活をイメージさせる語として用いられているのである。

従来日本においては、「女房と畳は・・・」や「畳の上で死にたい」の表現に見られるように、住生活そのものの象徴が、「畳」ということばであった。しかし、生活スタイルの変化によって、「畳」ということばは、今や必ずしも私たちの住生活を象徴するものではなくなってきた。 「畳」の語が、生活環境との関係において、どのように影響を受けながら、歴史のなかで存在してきたもののかについて考えてゆきたい。

二

「畳」と言われて一般的に思い浮かべる、和室に敷き詰められたあの「畳」の形状が庶民生活のものとなったのは、江戸時代の中期以降のことである。「畳」ということばそのものは、かなり古くから見られるが、ことばの外形が変化しないことで見失いがちなのは、そのことばの指し示す「もの」との対応である。「畳」もことばとしてはずっと長きにわたり生き残ってきたが、「畳」の形や状態は、現在の我々が思い描くものとは違い、時代とともに移り変わってきているのである。時代を追って検証してみよう。

上代には、古く『古事記』や『万葉集』に「タタミ」の語が使われているのを見ることができる。(用例は岩波日本古典文学大系による)

『古事記』

① 阿斯波良能 志祁志岐袁夜邇 須賀多多美 伊夜佐夜斯岐呂 和賀布多理泥斯

② 自_レ其入幸、渡_二走水海_一之時、其渡神興_レ浪、廻_レ船不_二得進渡_一。爾其后、名弟橘比賣命白之、妾易_二御子_一而入_二海中_一。御子者、所_レ遣之政遂應_二覆奏_一。將_レ入_レ海時、以_二菅疊八重、皮疊八重、絶疊八重、敷_レ于_二波上_一而、下_二坐其上_一。於_レ是其暴浪自伏、御船得進。

③ 意富岐美袁 斯麻爾波夫良婆 布賀阿麻理 伊賀幣理許牟叙 和賀多多彌由來 許登袁許曾 多多美登伊波米 和賀都麻波由來

たとえば、これら『古事記』の用例から考えてみよう。

① 「葦原のしけしき小屋に菅疊いやさや敷きてわが二人寝し」あたりは一面の葦原。しけしき小屋とは、湿っぽい小屋とか醜い荒れた小屋であろうが、とにかく質素な住宅。その中に「すがタタミ」をさやさと敷きのべて、そこで二人が寝た、という情景である。つまり「タタミを敷いて寝る」のである。「タタミ」は「敷かれるもの」であり、現在のあの和室に敷き詰められた厚い形状の「畳」では意味が通じない。これは同じ「タタミ」ということばでありながら、別の形のものであったことが推測されよう。「寝るために敷く」のであるから、現在の生活様式に照らしていえば「蒲団」ということばが連想されるが、形状はおそらく蒲団とも違い、ゴザやムシロに近いものであったと思われる。

タタミの語源については タ(手) アミ(編み) つまり手編みのもの、から転じたという説や、タタムという動詞から、つまり用の無いときは折り畳むとかタタミ上げるといふ説、などがあるが未詳である。いずれにしても、

タタミは、現在のように部屋を形作っているのではなく、敷き物であり、一種の寝具としての役割を担っていたものであったことが知られるのである。

②は『古事記』の倭建命の物語中に見られる用例である。ミコトの舟が走り水の海を渡ろうとした時に、そのわたりの神が波をおこして妨害し、ミコトの舟が進むに進めない。その時ミコトの後の弟橘比賣は、その身をいけにえに差し出して海神の心をなごめようとする。そしていよいよヒメが「海にはいりまさんとするときに、すがたのみを八重、皮タタミを八重、きぬタタミを八重を波のうえに敷きて、その上におりましき」と伝えている。材料も、先の菅（すげ）のタタミ「すがだたみ」以外に皮やあしぎぬという材質のタタミも存在して、これを八枚重ねて——厳密に八枚というより、幾枚もという意味であろう——用いた様子を知ることができる。

このように古くタタミは敷き物であったが、③の用例に見られるように、一種の信仰の対象にもなっていた。當時すでに厳しく禁止されていた近親相姦が発覚したために、帝位の継承権を剥奪されて伊予の国に流される時に軽太子が、その妹軽大太子に歌ったもので、悲恋の象徴の歌謡であり、「私の留守の間は、私のタタミを忌み謹んで守ってくれよ。」というのである。

この背景には、旅立つその人のタタミをそのまま大切に守っていないと、当人の身に禍いが起こると信じられていた、という当時の迷信が存在していると思われる、同様の信仰は「枕」にもあって、古代人が、寝る時に用いる道具というものに対して、特別な意味をもたせていたことがうかがえるのである。寝具に対してのこうした思い入れは、信仰の対象ともなつてゆくわけだが、迷信の背景には「寝る」という生活に不可欠な行為と、知らない間に見る夢への畏怖が存在していたとも考えられよう。

『万葉集』にも、「木綿畳手向けの山を今日越えていづれの野邊に廬せむわれ」（1017巻六）や「逢ふよしの出

で来るまでは畳薦重ね編む数夢にし見えむ」(2995巻十二)、「従愛子吾背の君居り居りて物に行くと韓国の虎といふ神を生け取りに八頭取り持ち来その皮を畳に刺し八重畳平群の山・・・」(3885巻十六)など見えている。

このように、上代にもタタミということばは今と変わらず使われている。ただし、現在の様な形状のものではなく、重ねられて用いられることの多かった寝具の一種で、敷物の名称であったことが『古事記』や『万葉集』の用例から知ることができる。私たちの生活に深く関わることはでありながら、このタタミということばは、私たちの日常生活の様子が変わるにしたがって、徐々に影響をうけてゆくことになるのである。

三

平安時代には、貴族の住宅である寝殿造が完成する。ここでは、平安時代の生活様式を知ることによって、タタミの実体がどういうものであったかを考えてみたいと思う。この頃になると、現在の私達が使っている畳の形状に少し近いものが使われ始めるようである。

現在、その寝殿造りの姿が最もよく再現されたものとして、京都御所の紫宸殿、清凉殿が知られている。春と秋に約五日間の期間限定で一般公開されており、平安時代の貴族邸宅であった寝殿造りの様子を現代に伝えている。寝殿という主人用の正殿を中心にして、東の対、西の対、北の対と呼ばれる家族用の住宅を屋敷内に配置し、それらの建物は渡殿と呼ばれる廊下で結ばれている。寝殿は入母屋造り、対屋は切妻造りで屋根は桧皮葺き、母屋を中心としてその外側に庇や孫庇があり、居住空間の広がりを出している。実際に建物を見ることによって気づくことは、壁に仕切られることなく、柱によってのみ支えられた広い広い居住空間であることだ。

西洋建築のキーワードは「壁」、日本建築のキーワードは「屋根」と考えられそうである。つまり西洋では壁で仕切ることによって強固な住宅をつくる目的がある一方で、個室尊重というか目的別の部屋を作ることを重要視するのである。日本の場合は、屋根を柱で支えて部屋を仕切ることをしなかった。大きなひとつの空間でいわゆるワッフルームに近い平面である。その内部空間を必要に応じて、屏風や几帳といった調度品で区切って、それぞれの場所を作るのである。平安時代の寝殿造には、ある意味で日本の根底に流れる住居に対する考え方、またそれに関連して、人との距離関係を雰囲気で察するという、日本文化の現れが見られるようにも感じられる。

さて、話を畳に戻そう。このように広い住居スペースを使い分けるひとつの用具として、畳が便利に活躍していたのである。当時の内部はすべて板敷きで今の用語でいえばフローリング。たとえば座ったり、寝ころんだりという場合、板敷きでは当然身体が痛くなるので、そういう時に敷物としての畳が重宝されたのであろう。ここでも、まだ畳は現在の形状ではなく、敷いたりたたんだりが可能なものとして存在していたのである。

『枕草子』の清涼殿内の描写や、また『栄華物語』にも「タタミ」の語が見られるのであるが、たとえば『枕草子』では次のような場面で使用されている。

①いとつややかなる板の端近う、あざやかなる畳一枚うち敷きて、三尺の几帳、奥の方におしやりたるぞ、あぢきなき。
(三三三)

②つとめて、いととく御格子まゐりわたして、宮は、御障子の南に、四尺の屏風、西、東にへだてて、北向きに立てて、御畳、御茵ばかり置きて、御火桶まゐれり。
(百段)

③春は空のけしきのどかに、うらうらとあるに、清涼殿の御前に、掃部司の、畳を敷きて、使は北向きに、舞人は御前の方に向きて・・・
(一三六段)

④二日ばかりありて、赤衣着たる男、畳を持て来て「これ」と言ふ。

(二六二段)

「タタミ一枚うち敷きて」「タタミを持て来て」「タタミ・置きて」と表現されており、「タタミ」は「敷く」ものであり、容易に「持つて来る」ことが可能なものであり、「置かれ」て使われ、「一枚」と数えられていることが知られるのである。現在の形のような、常にひとつの場所に固定されたタタミではないことが推測できるのであり、時に応じて、「敷かれたり」また「運ばれたり」「置かれたり」していたものであったのである。こうした『枕草子』の用例から、すでに当時の上流社会で、畳が日常的に使われていたらしいことが知られるが、その畳がどのようなものであったかということについても、絵巻物に描かれた貴族たちの生活の様子から、うかがい知ることができるのである。

絵巻は、視覚的に私たちに当時の貴族社会の生活状況の一面を知らせてくれる重要な資料でもある。

『源氏物語絵巻』や『紫式部日記絵詞』などに描かれたものを見ると、次第に現在の畳の形に近づき、縁取りもされたものであったことが知られる。当時のタタミは、単なる敷物、寝具というのではなく、『枕草子』の用例からもうかがえたようにタタミの周囲にはヘリがついていて（当時は「はし」とも呼ばれたようだが）、いろいろな模様や色が存在している。

たとえば、『源氏物語絵巻』の「第四十九帖宿木その一」。場面は、娘の女二宮に嫁がせたい今上帝が、薫を召して碁の勝負をしているところ。現存する十九図の中で宮廷内部を描いた唯一の場面であるが、大和絵襖や厨子棚など室内調度の使用の様子がうかがえ、当時の生活空間を知ることのできる資料でもある。ここでは、縁の模様が違う二枚のタタミが重ねて用いられている様子を見ることができ、中央に見られるものが、縦にカラフルな彩りの「縹縹縁」と呼ばれるもので、周囲に見えるのは、「高麗縁」と呼ばれるもの。『枕草子』で記されたタタミの

色や文様の様子を絵巻を参考にすれば、視覚的に確認することができるのである。こうして平安時代後期の宮廷社会の生活には、畳が用いられ、一部敷かれていたことが知られるわけだ。

四

中世に入ると、平安時代の貴族の邸宅であった寝殿造が変化をみせ、やがて鎌倉時代から室町時代にかけて、書院造と呼ばれる住宅様式が登場する。現代の日本住宅の根底に位置する書院造は、この時代に源流をもち次の近世に入って確立するのである。寝殿造では、居住空間はほとんど仕切のないものであったが、書院造では建物の内部をいくつかの部屋に区切り、それぞれに決まった機能を持たせるようになる。天井を張るようになったことも、固定した間仕切りが増えた理由のひとつのようだが、今でいう「ふすま」や「障子」といったものがあらわれるのも、この頃である。

さて、畳の方は、住宅様式の変化に伴ってどうなっているのだろうか。畳は敷物であり、むしろ寝具に比重のなかったものであったことは、すでに述べてきたとおりである。しかし、徐々に、畳の形や状態が変化していった様子が、中世期の絵巻物からうかがい知ることができるのである。

鎌倉末期の『春日権現霊験記』。春日神社に詣でることによってその加護で栄えるようになった俊成卿の邸宅の様子のなかに「置き畳」のうえに子供が寝ころんでいるのが確認できるが、平安期の絵巻に見られたような薄い畳ではなく、この畳はすでにある程度の厚みがあって、簡単に折りたためるような形状ではないことがわかるのである。こうした中世の絵巻に描かれている畳は、畳の厚さが明らかに厚く描かれていて、畳のへりは、上面と側面そ

れぞれ同じ幅に描かれているので、現代の畳の厚さに近くなっている様子が知られるであろう。

また、『一遍聖人絵伝』には、ちようど畳を運ぶ僧侶の姿が描かれている。部屋の隅に寄せて畳を敷いている僧侶の姿も見られ、中世期においても、このように畳は、必要に応じて、人が座る場所または寝る場所に運んで用いられるものだった。もともとは、薄くて、おそらく不用な時は巻いて保存されていたと思われる畳であるが、この頃から次第に今の私たちが使っているような厚い形状の畳が使われ始めていたことが想像できよう。ただ、まだ今のようには部屋全体に畳が敷き詰められるという状態は、珍しかったようである。

『法然上人絵伝』には、畳が敷き詰められた部屋も見られるが、それは小さい部屋に限られていたようであるし、広い部屋では周囲に畳を追い回しに敷いて、中央は板敷きを残している様子が描かれている。『蒙古襲来絵詞』には、鎌倉時代の武士の邸宅が描かれているが、蓐戸（しとみど）を吊り、広い板敷きの間にはくれ縁近く、部屋の周囲に追い回しに小紋高麗縁の青い畳が敷かれている様子を確認できるのである。

しかし、毎回畳を動かす作業がわずらわしくなってきたのであろう。まず、小さな部屋で畳が敷き詰められるようになり、そして次第に広い部屋にも畳が敷き詰められる状態になっていったと思われる。畳が、移動可能な座るための道具「座具」や寝るための道具「寝具」ではなく、床を仕上げる建築材料として固定されるようになってゆく前兆の段階である。こうして畳を敷き詰めるためには、畳の大きさを規格化する必要が生じてくるのであるが、さらに、畳がきつちりと部屋の中におさまるように畳の寸法を基準とする設計思想が生まれることになってゆくのである。

このように、寝殿造から書院造への住宅様式の変化に伴って、畳もその形状と用途を変化させていった。間仕切りがなく、屋根と床だけで構成された寝殿造りの大空間から、ひと部屋ごとに間仕切りの建具や天井で囲まれた中

世住宅の内部空間へと次第に変化してゆく。そんななかで、畳もそのことば自体は古くからずっと変わらず使われ続けてきたのであるが、その「もの」としての形態が変化してゆくわけである。座具寝具といった移動可能で持ち運びに便利な薄い畳から、次第に厚い固定式の床材料として生まれ変わっていった。いわば移動できる家具から、固定された建築構造の一部になったのである。

桃山時代から江戸時代へと時代は移ってゆく。書院造は茶道の発達によって、次第に軽快な書院造を生み出してゆき、本格的な格式ばったものから、生活の場として機能する、茶室の意匠や手法を取り入れた建築様式へと移行する。書院造を基本としながらも、ややくだけたなごやかな空間を形成する様式が生まれ、これは数寄屋造と呼ばれる。その代表的なものが京都修学院山麓の曼殊院の書院で、曼殊院は代々皇族の子弟が住んだ門跡寺院である。たとえば、曼殊院の書院、黄昏の間。菊の文様を連ねた欄間。長押には富士山を型どった釘隠しが打たれ、細部の細工が凝った作りになっている。「あそび」の雰囲気と空間を演出して、また内部空間だけでなく、庭や自然の風景、四季折々の風物も数寄屋造の重要な要素であった。こうした書院では畳が敷き詰められることが普通であり、茶室建築から、畳はやがて町家（まちや）に引き継がれてゆくことになる。敷物であった畳が、次第に敷き詰められる厚い形状のものになり、一般庶民にも用いられるようになるのは、江戸時代も中期以降のことで、農村においてはさらに遅く明治時代になってからのようである。

五

古くは、畳は、座ったり寝たりする時に必要とされた道具であった。しかし、こうした用途以外に畳には、ほか

にも重要な役割があったようで、それは、上流社会において畳がひとつの権力の象徴でもあったということである。平安時代の貴族社会においては、そこに座る人の身分や地位を表すために、畳の厳密な使用法が決められていて、身分の高い人ほど座る畳も広く、厚さも厚く、そのうえ畳を重ねたりしたらしい。

一四二〇年成立の『海人藻芥』に身分と位階による畳ヘリの使用規定が見られる。

「畳之事

帝王院繡縹縁也、神仏前半畳用繡縹縁、此外更不可用者也、大紋高麗縁 親王大臣用之、以下更不可用、大臣以下公卿小紋ノ高麗縁也、僧中者僧正以下同、有識非識紫縁也、六位侍黄縁也、社寺諸社三綱等皆用黄縁 云云、四位五位雲客用紫縁也」

天皇は当時でも貴重な、最高の織物である繡縹錦を使った繡縹縁を用い、これはまた神仏の前に座す半畳にも用いる。次いで、親王や大臣は大紋の高麗縁を用い、公卿は小紋の高麗縁を用いる。僧正はじめ僧侶たちが紫色の縁、そして社寺や寺内を統領する僧たちは黄色い縁を使う。というように、畳のヘリについて、色や文様で身分を区別した様子が知られるのである。最初は、上流社会にのみ使われていたこうした畳が、一般にも普及し始めると、身分や地位を表したり、示したりする方法が必要となってきたのであろう。畳のヘリの色や文様を区別することで、一種の権力の象徴的役割を畳がになっていたのである。

京都御所の中に、諸大夫の間と呼ばれる御殿がある。公家たちが、昔表向きの御用で参内する時は、宜秋門という門から入り、御車寄にいたり、御殿に上がる。御車寄の南にこの諸大夫の間があり、昇殿した人たちはこの御殿を控える場所としていたのである。ここは東西に三つの部屋に分かれていて、東から「虎の間」「鶴の間」「桜の間」と呼ばれ、西の「桜の間」が本来「諸大夫の間」であるが、その名が中世この御殿の総称になったようだ。「虎

の間」は「公卿の間」ともいわれ、小紋高麗縁の畳が敷き詰められていて、襖に虎の図が描かれている。この部屋は、節会などの時に、三位以上、参議以上の公卿の控えの部屋として使われた。「鶴の間」は、「殿上人の間」ともいわれ、小紋高麗縁の畳が敷き詰められて、襖に鶴の図が描かれている。この部屋は、諸大名、所司代、門跡でない僧侶などの参内のときの侍所であった。「桜の間」は、「諸大夫の間」ともいわれ、紫縁、これは紫が退化して赤くなり、今は紅絹縁というが、このヘリの畳が敷き詰められていて、襖に桜の図が描かれている。

このように、現在の京都御所の様子からも、当時の状況の一面、つまり身分によって控える部屋が定められ、その部屋の畳のヘリを違えることで、上下関係が厳しく区別されていたという状況をうかがい知ることができる。

六

現代の私たちが「畳」ときいて想像するものと、違った側面をもっていたことが紹介できたと思われる。『万葉集』や『古事記』に見られたように、もともとは薄い敷物を指して「タタミ」と呼んでいて、持ち運びの出来る道具であり、寝る時に敷く「寝具」としての用途になったものであった。しかし、生活環境の変化、住宅様式の変化とともに、次第に固定化した建築材料となってゆく様子を絵巻物などを参考に検証してきた。

畳は、素材を藁と蘭草、それに布と紙を少し加えて形成されたものである。材料ひとつひとつの耐久性は、いずれも短かい命のものであるが、一個の畳として形づくられると半永久的なものに変化するのである。この畳という床材料は、世界の建築文化から見ても非常に珍しいもので、日本に独特に発達したものであるようだ。畳の敷き詰

められた部屋は、ある時は食事室になり、ある時は家族団らんの居間になり、そして蒲団を敷くと寝室に早変わりするという、不思議で便利な、日本の狭いこの住空間をうまく利用した生活様式であると思われるのである。

この「畳」は、今や海外においては日本文化を代表することばのひとつになっている。数年前の『知恵蔵』『現代用語の基礎知識』に、外来語略語として「タタミゼ」という語が掲載された。

「タタミゼ (仏 tatamiser) 日本のたたみなどを取り入れる。日本風の生活様式や室内装飾を採用する。」

『現代用語の基礎知識』(1993)

「タタミゼ (tatamiser 仏) 日本風の生活様式や室内装飾を取り入れること。畳をもじったフランスの新造語」

『知恵蔵』(1995)

これは、フランスの新らしい造語「tatamiser」(タタミゼ) から日本に逆輸入された語で、日本風の生活様式や室内装飾を取り入れることをいうものである。フランスにおいて、日本の生活様式の代名詞として「畳」が市民権を得ていることが物語られた言語現象といえよう。日本通のドイツ人も「tatamisieren」という語を使用するという。「-ieren」という外来語化のパターンを「畳」に接続させた新しい造語で「畳の間に座る」意味の動詞として用いるらしい。

一九八九年に Oxford English Dictionary の第二版、全二十巻が出版されたが、大和田栄氏の研究(大和田栄「OEDに見られる日本語―資料と分析―」『東京成徳短期大学紀要』第二八号、平成七)によれば、掲載された見出し語中、語源欄、定義欄に「日本の」という記述のあるものが三七三語あるという。見出し語の引用例の多い語はそれだけ英語に浸透した語といえようが、多い順に「tycoon 大君」「kamikaze 神風」「soy 醤油」「samurai 侍」「tatami 畳」「Zen 禅」「Shinto 神道」「kimono 着物」「柔術 jujitsu」「judo 柔道」(『Oxford English Dictionary』(1989) 2)

続く。日本宗教の伝統である神道や、民族衣装としての着物をおさえて、畳という住生活語が五番目であることは注目に値しよう。このように、英語圏、フランス語圏、ドイツ語圏において、畳の語が日本文化の代表として考えられている様子がわかるのである。

おわりに

明治十年（一八七七）に来日して日本の生物学や考古学に大きな成果を残したエドワード・モースは、『日本人の住居とその生活環境』（*Japanese Homes and Their Surroundings*, 1866）という著書のなかで、日本の「畳」の心地よさを語っている。

日本でしばらく生活してみて感じることは、寝ころびたいと思うときなくてはならない物があまりにも少ないという点である。さらに思うことは、アメリカでなら、寝ころびたいときに不可欠と思われる多くの用品が日本にはないのだが、むしろそのことによつて、日本では寝ころぶということの在りようが次元の高いものとなっている点である。ベッドとそのしつらえかたについてみるに、日本人はこの作業をこの上なく簡素化した。床面全体、まさに家全体が寢床となるのであつて、通風が良くても悪くても、また二階でも階下でも、すべすべした畳上に身を投げ出せばよいのである。そこにあるものは感触が良くて安定感があり、かつなめらかな畳である。眠るのはその上である。――ばねが軋んだり、堅いこぶ状の部分や感じの悪いへこみがあったりということはない。寢床となる畳面の広さは部屋そのものと同じくらい広く、ほんとうにくつろげる。

このように「畳」の語は、まさしく日本文化の代表選手であり、海外での日本文化普及の一面をにない、日本文

化の象徴でもあった。ところが、こうした海外での評価とは裏腹に、日本では最近なぜか人気がない。新築マンションの売り物は、フローリング仕様といわれる板の間で、畳やカーペットは敬遠される。そしてフローリングの床には時に応じて「たたんだリ」「敷いたり」することが可能な「敷物」が利用されるらしいが、まさしく、ひと昔前の生活様式への後戻りの現象といえるであろう。

日本の住生活において、「畳」はその使用歴の長さにおいても、また狭い住生活空間を便利に活用できるという点においても、大いに誇るべきものである。身近なことばであるだけにかえりみられることは少ないが、畳ということばが、私たちの住生活の変化とともに形状や価値観をも変化させながら生き残ってきた、言語文化史におけるキーワードのひとつであることは再認識されるべきではないだろうか。

〔付記〕 本稿は弘前大学国語国文学会（平成11年7月10日）における講演を基にしたものである。